



十
三

五言詩

十

15
1386
15止



15
1386
15



玉川集十四巻



梅十郎

美奈集乃一の巻。巨勢山姥つづく梅十郎くおといふ家頭
おとしぬき。和進もよめりハ。

母を泣く泣ききつづくお

思へたおとこおとこおやう。

さるに口がまぢうへうらねへうも何とぞさへも此世乃もくぢぬ人
のあつたおとこあつたおとこあつたおとこあつたおとこあつたおとこ
こえがうたをきりて。此世くおもあつたおとこあつたおとこあつた
いしをもく。はなはたへくも何とぞさへも。

昭和九年
三月三日
小田村吉代
長男友大
郎氏寄贈

百濟國を以て天降て國を達すと神を祀らむ事

同欽明天皇^{ウツヒミカミ}御^{ミコト}志^{ココロ}十六年春二月百濟王子餘昌遣王子
惠奏^{ウツヒノコト}曰^{イハク}聖明王^{ウツヒミカミ}為^ニ賊^ト見^レ殺^サ云^ク蘇我^{スサノ}臣^{ミコト}問^ヒ訊^ク曰^ク云^ク惠報^{ウツヒノコト}
答^{コタヘ}之^ヲ曰^ク云^ク蘇我^{スサノ}卿^ノ曰^ク昔^{ムカシ}在天皇大初瀬^{ウツヒミカミノオホハジメ}之^ノ世^{ヨリ}汝^カ國^ノ為^ニ高
麗^{コリヤ}所^レ逼^セ危^キ甚^シ累^ニ卵^ヲ於是^ニ天皇命^{ミコトノミコト}神祇^{カミヤ}伯^ノ敬^テ受^ケ策^ヲ於^テ神祇^{カミヤ}祝
者^ノ迺^カ託^シ神語^{カミコト}報^フ曰^ク屈^ク請^ヒ建^テ邦^ヲ之^ノ神^{カミ}往^テ救^フ將^ル亡^ス之^ノ主^ヲ必^ズ當^ル國
家^ノ謚^ヲ靖^ス人物^ノ又^モ安^カ由^テ是^ニ請^ヒ神^{カミ}往^テ救^フ所以^ニ社稷^ヲ安^カ寧^ス原^ノ夫^ノ建
邦^ヲ神^{カミ}者^ノ天^ノ地^ノ割^レ判^ス之^ノ代^ニ草^ノ木^ノ言^フ語^ル之^ノ時^ニ自^レ天^ノ降^リ來^リ造^リ立^テ國
家^ノ之^ノ神^{カミ}也^{ナリ}頃^ニ聞^ク汝^ノ國^ノ輟^テ而^シ不^レ祀^フ方^ニ今^ニ悛^ニ悔^ム前^ノ過^ヲ修^リ理^ス神^{カミ}宮^ヲ
奉^ヒ祭^ス神^{カミ}靈^ヲ國^ノ可^シ昌^ク盛^ク汝^ノ當^ル莫^ク忘^ルと^シ及^ク今^ニ之^ノ言^ハ何^レ違^ハむ^{コト}乎^{ナリ}

是の時ふもろくわていともよきこととて自天降來造立國家之
神とハ須佐之男命たるべし邦代志をふくは令韓國ハ天降坐
よ〜と〜

高麗神子と詔あつた事

同孝德天皇^{タカヒコ}御^{ミコト}志^{ココロ}高麗國^{コリヤノクニ}の使^{シヤ}了^ル詔^ス大命^{オホノミコト}ハ明神^{アカツカミ}御^{ミコト}宇^{タテマ}
日本^{ヤマト}天皇^{ミカド}詔^ス旨^ヲ天皇^{ミカド}所^レ遣^ハ之^ノ使^{シヤ}與^ヒ高麗^{コリヤ}神子^{カミノコノミコト}奉^ヒ遣^ハ之^ノ使^{シヤ}云^ク
云^ク高麗^{コリヤ}王^ノを神子^{カミノコノミコト}と^シの^ミる^{コト}を^シこ^トも^シ神^{カミ}と^シハ^シ免^テ國^ノを^レ達^ス神^{カミ}を^レ
ひ^テ子^ノハ^シ末^ノの^ミす^{コト}を^シは^シみ^{コト}明^{アカツカミ}神^{カミ}と^シ詔^ス了^ル對^シへ^テ天皇^{ミカド}乃^チ
子^ノと^シ親^シて^シ詔^ス了^ルい^つ邊^ノに^シお^シ漢^{カン}文^{ブン}の^ノ詔^ヲ免^テづ^ル〜[〜]お^シむ^{コト}〜[〜]き
終^ハ〜[〜]と^シ〜[〜]

異國の使了神酒を賜ふ

同舒明天皇、在位六年、唐國使人高表仁等、到于難波津、
云、即日給神酒、玄蕃寮式小色、凡新羅、客入朝者、給神
酒、と云々、其釀酒料、稻、大和國、賀茂意富、纏
向倭文四社、河内國、恩智一社、和泉國、安那志一社、攝津
國、住道伊佐具二社、各廿束、合二百四十束、送住道社、大
和國、片岡一社、攝津國、廣田生田長田三社、各五十束、合
二百束、送生田社、並令神部造、差中臣一人、充給酒、使釀
生田社酒者、於敏賣崎給之、釀住道社酒者、於難波館給
之、と云々、抑此神酒を蕃客小給ふと、又小神功皇后乃在昔

ゆゑより何事なるべし。

神社の位階の事

同天武天皇、在位六年、軍政既訖、將軍等、奉是三神教言、而奏
之、即勅、登進三神、之品、以祠焉、と云々、品とハ、位階をいへるの
也、御八幡、神社、位を授けり、御八幡、物、御八幡、始、と云々
、其後、どこ、ハ、必し、と位階、おと、つ、で、と、社、の、班、列、を、あ、ま、り、
お、し、め、る、べし、三神の教言、其事、八幡の文の上、お、し、め、り、

左右京朱雀路朱雀門大極殿瓦ふき

京都を、左京右京と分らるる、藤原宮既、お、し、め、り、と、云々、大寶、お、し、め、り、
き、く、る、令、小、左、右、京、職、あり、續紀、大寶三年、お、し、め、り、と、云々、左京職、云々、の、事、

房キニも同十一年二月神祇官言伊勢大神宮寺先メニ為有
 崇遷建他處而今近神郡其崇未止除飯野郡之外移造
 便地者許之

皇太子伊勢大神宮小詣始

同紀小室龜九年十月丁酉皇太子向伊勢先是皇太子
 寢疫久不平復至是親拜神宮所以賽宿禰也キ又延曆
 十年十月甲寅先是皇太子枕席不安久不平復是日向
 於伊勢大神宮縁宿禰也十一月丁卯皇太子自伊勢大
 神宮至カシマラここの一夜のゆきありて史乃まぎ終して室龜と延曆
 と二夜記ともいふなりつとつと西のかりきや今知る

交野乃涉狩

同紀小延曆二年十月乙巳朔戊午行幸交野放鷹遊獵
 とりり交野の山狩ことや始ありむ

新撰字鏡

新撰字鏡ハカクテオホキテ終ねぬとありふとつとふと近
 きと出でて古きものことハアヤキく用ふるを何つと人乃
 後とありきむと序此文のいし拙きふてまゝとてあるや
 ういもくくぬぬ書しそいまがも字ども多くハオホキとび
 とやとてかきまゝありとびとていへ今とてども
 もかつてそいぬども序中ハ皇國の諸書私記の字漢國乃

なごを異國人の名でいふて日本人を形りやしく女もみな見
ふくきこぞやぞんむべきこと異國人のこふもいふがどい
白く入ふていふ昔の人のかゝるを繪ふうきつるを一度見れど
かづつそのおのづかきもその人れうかと思ひて描ぞか。

かん

たのこはのこいはいさしおきぬむやかくいつあふあふいづる
ぬいづもよきいづのこいのかづよたけいきたえきいづか
よりいよと見ゆもゆのありもろくは藝などもそのでうして
たの道の人もあつていふもいづてういそ他よりよきいづる
はのよと見ゆもやあり繪もきつるをいづれど今おのが思ひ

はぢをいふなりま何や海をもろくは古より代々の繪の事
とあまもいふ何の先づはけいけい糸をきいおきいづ
今の世あつていふおのづかきもそのいはいんそをまづ
まきいしたおきいづきなぞさけいけいの中ふ
いづるをいづてとて筆をきいけいけいけい
うろくやうたてそのおと見ゆことまづ筆の力つきをい
えせけるおのづかきもいづてよのうきるといふあうもい
やあつていふいづるもあつていづていづては繪師のうき
るもいづるいづるもいづるものありさるを世の人まづ
まづをいづるいづるもいづるを世のいづるいづる

うたふもかゝるべきや。おのづからいふ事よ
おちゆるや。ころばしめかゝるも多き。そのまらひよ。あつた
え。い。ころばしめ。あつた。い。み。い。た。お。ん。と
き。さ。い。え。い。た。あ。り。

漢ふみふ。あ。せ。る。り。み。づ。り。ふ。信。ぎ。ま。い。た。る。

世の学者。その疑い。たを。か。書。ふ。あ。り。え。さ。い。や。い。た。
疑。ま。い。信。ぎ。る。い。い。と。を。と。あ。り。ま。い。て。漢。籍。う。た。ら。る。り。ひ
か。ら。い。そ。う。い。や。ま。い。その。言。よ。た。ふ。ま。い。ひ。き。み。づ。り。り。
信。ぎ。づ。き。ふ。あ。り。ま。い。

日食月食

も。後。ろ。い。た。聖。人。日。食。月。食。の。ゆ。え。を。い。ふ。え。を。り。ま。い。て。こ。と。を。い。
ひ。と。い。へ。る。も。ま。い。

○世れ中のあれるは皆神の志まがなる事

世の中のよろけの事。と。み。お。け。や。い。た。を。こ。れ。奇。い。妙。なる。神
の。志。ま。が。なる。こ。と。を。い。ふ。ま。い。て。巴。が。お。い。は。り。の。理。を
い。て。い。た。と。い。ま。い。お。い。り。や。も。ま。い。ね。ぬ。事。を。理。を。以
て。や。か。り。い。た。か。ら。人。の。こ。と。を。い。り。その。い。や。こ。の。理。を。い。た。は
ふ。も。い。た。い。ま。い。お。い。り。の。か。ら。人。の。い。ひ。お。き。る。理。後。世
り。い。り。て。ひ。が。い。た。ま。い。の。い。り。い。た。事。お。お。い。ま。い
は。い。ふ。理。の。さ。り。が。い。た。事。ふ。た。ま。い。こ。れ。を。天。と。い。ひ。て。の。が

予、みね神、何れをもあはれんや。

聖人をさるる

世に於ては、人おしあはれず、かの世の聖人といふ物を、信
ざる中、あま、実なるもの、志んば、人も、何るべく、又、世に、
おそや、思ふこと、何れも、聖人、おあはれ、世の人の、
てうきぬ、こと、何れも、およかり、その、信、
へるも、あり、む、お、又、世に、
た、かの世の王、お、その、
中、お、
ほ、

ト筮

も、
お、
や、ト筮、
め、
あり、ト筮、
己、
と、

華夷

も、
と、

也といふ。天命のうぐわ。かくむがこもさる。

又

論語此中ふと。堯舜禹泰伯文王をむつみくちめられが
も。湯王武王をほめくくも。一言もあ。意らる。命
け。湯王が言をけむる。孔丘の意あらはる。

又

同書ふ子曰。孰謂微生高直或乞醯焉。諸其鄰而與之
とあり。聖人の教の刻酷なるをかくのめ。それハもい
く。不直といふべきや。おほりのさやあり。又も
をさへ。不直といひてやむるも。おほりのさやあり。又も

弘安四年に諸藩帝
其用心非曲非直
人其用意のれ也
寧ろして無きものも
あせてていふこと
をた直人しけり
思ふは世人の評は南
に於て我らも解は
此のたしと解けり
此のたしと解けり

此のたしと解けり。論も直を見ず。あも直あり。右に四部の名に目を付く。此所は主廻りて世所する。即曲

此のたしと解けり。論も直を見ず。あも直あり。右に四部の名に目を付く。此所は主廻りて世所する。即曲
此のたしと解けり。論も直を見ず。あも直あり。右に四部の名に目を付く。此所は主廻りて世所する。即曲
此のたしと解けり。論も直を見ず。あも直あり。右に四部の名に目を付く。此所は主廻りて世所する。即曲

又

同書ふ。廐焚子退朝曰。傷人乎。不問馬。其甚いなり。是ぐ
て人の家の焚んあも。人えさ。やうもああ。馬をよ
やく。のなり。馬をのやけんふ。人もらあ。こも
る。こも。馬を。同。け。人

る。ごもあまのい。一。石原あが。有りける。かして。皇女おを國こよ
と。世の紙のふいり。多くと。厚きうすた。強きやうう。なる。さ。備
阿ももつ。う。ご。ご。ね。ど。抽かく。あ。を。唐。紙。及。身。の。な。
ん。た。い。う。ご。ね。ゆ。う。む。あ。ご。ご。我。を。あ。り。地。が。ゆる。あ。り。

○古にもも後世れまらるるなり

古よりも。後世の。は。ま。紙。ご。ご。の。物。お。も。事。あ。も。松。布。一。つ。紙
い。も。む。ふ。い。あ。へ。て。橋。を。あ。ら。ひ。ち。ね。た。抽。あ。り。て。多。く。つ。り。紙。近。き
世。の。ハ。み。え。ん。と。い。ふ。抽。あ。り。て。此。み。え。ん。ふ。ら。う。あ。れ。だ。橋。を。紙。お。も。阿。う
を。き。お。ま。ね。り。り。その。外。加。う。じ。ゆ。の。紙。ん。ほ。ご。い。う。な。が。れ。ま。ご。い
お。わ。き。中。ふ。蜜。棋。ご。味。こ。と。ふ。ま。ご。ら。れ。て。中。ふ。も。橋。お。よ。く。似。て。こ。よ。の

く。ま。ら。る。抽。あ。り。此。一。つ。紙。お。は。る。べ。い。或。も。古。ハ。あ。り。て。今
ハ。阿。の。抽。も。お。わ。く。い。お。へ。を。わ。ろ。く。て。今。の。も。と。紙。ご。ご。多。い。こ
世。を。も。て。地。へ。ご。今。より。後。も。又。い。う。ふ。阿。う。む。今。ふ。勝。ま。り。抽。お。わ。く
物。ま。べ。い。今。れ。ん。ゆ。て。思。へ。ご。古。ハ。あ。り。何。の。事。あ。ら。う。ご。阿。あ。り。す
お。わ。り。り。ご。む。さ。ら。ね。ご。その。世。ご。ご。さ。も。お。あ。ら。う。ご。阿。あ。り。を。ん。
今。より。後。ま。ご。抽。の。多。く。と。紙。が。い。で。ご。ん。世。あ。ら。今。を。も。あ。り。思。お
を。ら。れ。ご。ご。人。事。あ。ら。う。ご。ハ。お。わ。ら。ぬ。が。ぬ。い。

某れ家といふこと其の亭とかく

歌。れ。會。な。ご。ふ。某。家。と。い。ふ。ご。ご。近。代。と。必。某。亭。と。か。く。ご。ご
あ。ら。る。も。い。う。ご。古。く。も。み。ぬ。某。家。と。ご。ご。阿。れ。亭。の。字。ハ。あ

多しぬあやかり。

名所

秋松の國郡を論ずる。ふるた歌ふよめる城よく考へて。その國郡を定むべし。後世の交を。多しぬの意ふより事なる所をよむ故也。その風俗をむむむ。そふよめる。故也。後世の歌えさうふ擧とまふふ。歌詠のこたふ。後世の交を。そ此所ふいつりてよめるも取らぬこと何り。いつりつふ。ふるた秋松を。中昔の書ふ某國ふ何り。注せるふ。いみく。注せる。の。多たを。後の人。その語。注ふよりて。その風俗。名所を。つらりあまへて。或も万葉ふよめる某山。こたふ。何れ。いふ。

かひおちき城。その名を。注れむ。その名の。むろ。て。よ。ア。その所の。ぬく。た。他。の。人。そ。あ。いつりて。その名を。き。て。よ。る。む。か。ひ。お。ち。き。れ。む。なり。

混本

古今集。真名。序ふ。混本。と。ふ。歌の。神を。何。き。く。思ふ。ふ。こ。ま。本。混。む。と。つ。あ。な。ま。を。旋頭。歌の。亦の。名。なる。べし。別。ふ。此。神。何。る。お。あ。じ。然。る。を。古。今。此。序。ふ。と。別。の。一。体。と。ふ。ゆ。え。い。つ。ら。又。も。長。歌。短。歌。と。ふ。四。字。の。對。ふ。せ。む。あ。め。ふ。旋頭。を。旋。頭。混。本。と。か。け。る。う。い。つ。れ。り。ま。れ。別。ふ。此。神。を。何。る。ま。じ。く。な。ん。後。れ。書。と。も。う。その。秋。と。載。る。心。と。あ。り。何。れ。と。そ。と。あ。れ。古。

今集の序ふよりて。ことごとく。造るまうけあるものあり。ふ
り。ふらぬ事あり。その亦ふ古より。混本躰なり。歌をあるゆ
なきし。

又や歌

多し。か。ち。ど。く。人。歌。そ。く。か。み。か。お。ま。り。ど。く。な。る。歌。古。今。集。に
序ふ。三つふ。わ。き。く。る。ち。あ。ひ。を。か。く。ふ。れ。六。義。と。い。ふ。事。ふ。何。て
お。と。の。ち。あ。ひ。を。な。ら。ん。ま。へ。て。六。義。と。い。ふ。事。歌。ふ。何。も。や。あ。り。
い。み。し。事。あ。ひ。お。や。那。也。

又や歌此やう

多し。歌。古。今。集。よ。り。こ。の。ち。の。ち。の。歌。を。い。ふ。事。あ。り。い。

意。何。ん。ふ。あ。り。や。う。ふ。よ。り。も。の。あ。り。然。る。ふ。萬。葉。集。が
る。こ。の。事。あ。り。や。う。て。そ。れ。よ。み。こ。る。人。も。あ。り。い。ふ。事。あ
ふ。べ。く。れ。ど。後。ふ。そ。の。か。を。い。ふ。事。あ。り。い。ふ。事。あ。り。い。ふ。事。あ
よ。あ。ハ。志。道。が。い。た。が。あ。り。さ。れ。ば。今。地。の。歌。を。や。く。ふ。大。く
ふ。ハ。お。い。と。う。く。る。れ。ど。も。あ。り。い。ふ。事。あ。り。い。ふ。事。あ。り。い。ふ。事。あ
い。い。と。う。く。る。れ。ど。も。あ。り。い。ふ。事。あ。り。い。ふ。事。あ。り。い。ふ。事。あ
木。鳥。虫。の。う。へ。の。詞。と。あ。り。い。ふ。事。あ。り。い。ふ。事。あ。り。い。ふ。事。あ
て。よ。め。る。多。し。是。又。さ。ら。に。い。ふ。事。あ。り。

またはひ

幸といふこと。此方れ古書にて。多く福の意を用ひて。差別なり。

志る誠字の義を異にして幸え福を受へき由なくして偶然
を得ざるをいふも後うして用ふるもみね其意なり。

○教誠

を後うして古書をいふも誠をのこすといふもいふも
うもいふも人を教ふよりてよくなるものありけり。教を
ま川ゆのふいけぬを。あはれりていふも。是れ教のありや。ふ
姦曲詐偽のまきふるを。いふも。周公且。いふも。ふこた。ふ
く定先くるゆふ。周の末の乱をおこせり。戦國のころの人の邪
智ふうたを。みね周公がをいふも。皇國れ古書。ふ。ふ
むくりも。をいふも。いふも。いふも。此けぢめをいふ考ふべし。教

誠の敬あるをよむこといふも愚なり。

孟子

孟子曰。不孝有三。無後為大。といへり。然る時。後何んが孝なり
とや。志る誠。いふも。後あるが孝なり。身を富貴ふせむこと
大孝なり。志るを。儒者の富貴を。恥むが。いふも。いふも。いふも。
身を潔くせむこと。親を思ひ。いふも。いふも。いふも。又不孝といふべし。

又

子産聽鄭國之政。以其乘輿濟人於溱洧。孟子曰。惠而不知為
政。十一月徒杠成。十二月輿梁成。民未病涉也。君子平其政。
行辟人可也。焉得人人而濟之。故為政者。毋人而悅之。日亦可

足矣。これ理窟なり。子産その渉りてづらふ人を足す。いまは
國中此民を足す。惻隱の心政をなさふ多かり。此齊宣王
が牛を何れとせしむるをほめて。是心足以王矣といふ也。
まゝ不嗜殺人者能一之といふ也。秦始皇の「つゝ」とい
うり。又程子曰。孟子性善養氣之論皆前聖所未發といふ。
性善養氣の論も前聖此意ふらざる。何ぞこれを發せん。又
盡心篇より孟子曰。不仁哉梁惠王。かむり不仁を行ふ人
り。王道をまめしむるをり。まゝ民為貴社稷次之君
為輕といふ。其の云ふ所の惡言なり。かくて孟子終篇多
親ふ孝なるべきものをもおぼしめて。君尔忠なるをさす

をいつるを一つもせし。又孟子告齊宣王曰。君之視臣如手足則臣
視君如腹心。君之視臣如犬馬則臣視君如國人。君之視臣如
土芥則臣視君如寇讎。云々。此之謂寇讎々々。何服之有。ちかど
いへ。此一章をもて。孟軻が大惡をさす。なげ。これハ君ある。
人ふ殺へる語といひなげ。何れハ口ふまうせし。惡言なり。
此書人の臣多しむもの。足べき書あり。臣ある人ふ不忠
不義を教へしものなり。其國を去てその君を足んが。とて。
これに寇讎といふ。せむ。いふ。惡言なり。おぼし。
なげ。おぼし。

如是我聞

もろくは佛經のばげんふ。如是我聞といふこと。さへ故ある
るのぞいひなせれども。末この文ふりぬるはげんふかくいへるも。
いつしあへてもひがごとめてつゝおきことあり。又我聞如是と
こそいふべけれ。言のついでもいふことあり。天竺國の
なべてのちうひふもいふべけれども。翻譯者も拙く。まづて
漢字にあらん人のよをかけるふも。詩文を作するふも。和習くこと。
つゝふいふことなるも。佛書に文あり。又天竺習の多きあり。

道教ふまゝか。西の王どもの異さはなる号

唐玄宗會昌投龍文。自称兼道繼玄昭明三光弟子南嶽上
真人。宋徽宗群臣上尊號為玉京金闕七寶元臺紫微上宮

靈寶至真玉宸明皇天道君。其上章青詞。自称奉行玉清神
霄保仙元一六陽三五璇璣七九龍天元大法師都天教主。主
云々々々。屈万乘之稱。從黃冠之號。不亦兒戲狂惑之甚哉と
いふ。件の号ども。道教ふ惑へる号なり。拙くことなり。聖武天
皇に沙弥勝滿と御名告らせ給ひ。東大寺の太佛ふ對ひ給
ひて。三寶の奴と詔へる類なり。

佛道

佛道も。まづ悟と迷ひとをまゝまゝして。その悟を得ることあり
て。その餘のふもみぬ枝葉のとなり。かしてその悟といふは。まづ
無用の空論ふして。まゝとせよ。益あるふもなし。志するは。世の人。

其王曰汗自鄂羅斯之察罕汗歿無子國人立其女爲汗嗣後
皆傳女迄今已七世矣仍襲其祖名号故國人猶稱爲察罕汗
也其女主有所幸或期年或數月則殺之生女留美統續謂其
汗之嫡嗣也生男則以爲他人之種也云々云々此いさゆるムスコ
ビヤちあひあふる右の下文いさゆる本控噶爾屬國稱臣納貢
由來已久乾隆二十年察罕汗恃其強大不復稱臣云々仍復
稱臣云々其俗最重君臣之義如其汗雖無道之極亦無有敢
議其是非者自古無叛逆篡奪之事一姓相傳不知幾千年視
他國之朝夕易姓者相懸矣云々あはれいさゆる控噶爾西北方回
子最大之國地包鄂羅斯東西界之外云々ちあひあふるこの

控噶爾といふ國はあはれいさゆるムスコビヤのことあはれいさゆるう。何
とくや混雜の誤りさゆるあはれいさゆる

天

あはれいさゆる何あつきても天天といふを神いさゆるを志さるる故に
むがことあり天をいさゆる神のまゝに國あはれいさゆる何を心も行ひも
道も何もあはれいさゆるいさゆる天命天道をいさゆるみな
神のまゝにあはれいさゆるあはれ又天地を萬物を生さるる抽と思ふ
もむがことありあはれいさゆるの生さるるもみは神の御志をいさゆる天地を
いさゆる神のこれを生さるるあはれいさゆる場所のいさゆる天地のこれを生
さるるあはれいさゆるあはれいさゆる人の云く天聖人あはれいさゆる暴を征伐

して民を安ぜしむといふ。是れも天れ志を正ししは、
りして、むがことをねき物とゆふる。世中も、理りごとひ
多る。此多きをいふ。その理ふ多きひくることあれや。せ
多。天れ命をたむせん。その理りて、神の天のむがこと
をむ。やぐめざるはいやをう。天もひがこやまらなうを。
これ聖人。命じて、君を亡して、天下をやうせしむ。天れ
むがこと、いふ。

國を治むるは、其學問

國を治むる人、其かごとく、
宋學のふ。おどおきれど、全くて、そこちひなり。近き世の古

文辭家の學問、え、よ、せ、い、み、た、や、ま、を、引、つ、を、
さて、乱、ま、る、世、を、え、志、を、く、も、ろ、く、此、書、を、さ、し、お、ま、て、
昔、此、戦、を、た、し、る、軍、書、と、い、ふ、もの、を、つ、ひ、ふ、う、く、後、へ、し、
人、の、よ、さ、り、さ、か、し、た、お、ろ、う、な、る、こ、ろ、志、を、さ、し、
な、と、い、ふ、よ、く、考、へ、る、う、。

板坂ト齋物語

板坂ト板拍津といふもの、ふ、い、く、九月朔、
臨に、御、者、ゆ、石川日向守家成、今日を西ふさがり、悪目、
合戦の、首途、^{カトイデ}如何と申上、
日、何、き、ふ、系、ゆ、と、御、意、
○三十九

さく阿きこくなるぬり。もぐ羨を品をかくて。教おちきもよろ
し。さて昔をきて。阿つもあといひしを。近き世ふハ。姑の一つを。汁と
つひ。次お出まを。二の汁といひて。その録を。汁といひて。阿物や
いひて。ちるとまひ抽とハ。別なるぬし。又いそゆる。甘菜をむ。昔ハ阿を
せとつり。清少細を枕冊子などふ。又伊勢神宮の書ふ。まハ阿
と阿るを。伊勢れ言ふ。此ぬの今も山里人など。海を阿とふ。阿阿り。

伊勢國

伊勢れぬハ。かゝるぬのう。阿ぬと古語もいひて。北のたてより南
のたてまで。西の方を山とつぬりつたて。まことふ青垣をちのせり。
東の方を海とていせれ海とよそれなり。かゝるぬの阿山を

海との間。ひろく平系ありて。北を桑名より南を山田まで。七里
あまりが布ど。山といふ物一つもこゆることなく。ひんつたの国系な
り。その間ふ。廣た里くおちる中ふ。山田。安濃津。松阪。桑名など。
ことふよきつり。大きなる里なり。大なる京より江戸まで。七国八国
を種てゆく。阿ふ。ちむりれ大里を。近江の大津と。駿河の府をお
きてハ。阿るをちり。外のちも思ひやゆる。阿伴の里くちつきて。
四日市。白子などよ。阿邑なり。かくて此國。海の物。山野の物。まへて
やも。しう。暑さ寒さも。他國あふ。ふるふ。さしも甚しう
ぬ。但し。さぬ。北の方へよるま。ふ次。阿を。風ハよく
ふ。ぬ。阿。國のあぎ。大御神の宮。阿ま。づる旅

人多ゆるこそなく。ことふ春其れ程た。やしくおぎりくしたる。
大なる天下ふあつびなう。土^{ツキ}こえて。稲いとし。ふなつ物も畑つ物
も。大なる皆よし。かくておぼむ。ことふよ記里あて。里のひちきくる
た。山田ふつぎ。れど。富る家おちく。江戸ふ店とり。物をかまへ
おきて。手代とり。物をおちく。何せせ。あきおひせさせて。何
い。國おの。居て。何そびをり。うづをさ。も。何うで。うちく
い。ゆ。ゆ。おぎりて。さる。ま。て。此里。町まぢ。ゆ。ま。正
く。家な。ま。く。一。ご。と。ふ。一。戸。二。尺。づ。お。の。て。ひ。と
か。ま。い。と。ま。ま。き。お。家。居。を。さ。も。う。り。く。ま。ま。し
と。内。に。は。ま。ま。ひ。た。い。と。よ。水。も。よ。記。系。と。目。記。系。と。何。う。て。ひ

や。く。く。川。水。ま。く。な。潮。も。さ。る。船。が。よ。り。山。へ。ハ。大。方
一。里。何。ゆ。り。海。へ。ハ。半。里。何。ゆ。り。諸。国。の。あ。よ。り。よ。し。こと。ふ。京。江。戸
大。坂。も。多。ゆ。り。よ。し。諸。国。の。人。の。入。る。國。な。れ。む。い。づ。と。よ。し
ふ。ゆ。り。よ。し。人。の。心。も。よ。く。も。何。ま。ぢ。お。ぎ。り。て。は。こ。ま。く。な。い。人
の。こ。ら。男。も。女。も。お。中。び。し。る。こと。さ。ふ。な。く。よ。う。女。を。里。に
ゆ。こ。ふ。ふ。ぎ。り。く。た。ま。ふ。ま。ま。ご。よ。ま。ひ。す。ま。ま。て。ま。ま。く
京。ふ。お。と。ゆる。こと。な。い。人。の。物。り。ひ。た。尾。張。の。中。ゆ。り。東。の。西。ハ。船
ま。り。地。を。き。銭。伊。勢。も。太。く。な。り。な。い。ま。れ。ど。山。城。大。和。な
ど。ハ。何。と。な。く。ま。ま。い。や。い。詞。も。り。や。い。記。も。多。い。い。よ。ゆる。品
服。抱。小。間。物。の。ま。ま。し。松。坂。も。よ。記。品。を。用。ひ。て。山。田。津。な。ご。を

こよろく代物よし。されを商人の京より志しるも。松坂ハことり
抽よく上々此品なり。京の阿き人つひふ本うよふなり。時これをや
目物も。をりこさば。諸藝を断くふ阿をせてハ。よれことも阿らば。
色ろく此物ユいとよふなり。あきねひごとあきりし。芝居。足せ抽。
神社。佛園まてあきりし。まて此物也。他處の人おやく入こむ
國なるぬふようぬ物もおやく。盗なども多し。松坂也。魚類野
菜などもまてゆこり。まねど魚も。鯉鮒もななく。神芝草ふ
も。くまお蓮根などもななく。松坂の阿るぬるも。町筋の心しう
らどあぢけなきと。船のうよらぬとあり。

米粒を佛法ほさるをいひなくる

穀物をおろそうふまま。見よ。をりあ時ふ。米粒など。佛法
といひ。東國多て。菩薩といふ。これ大切なり。おろそうふは
いふよう。なれど。然り心といはう。きれども。佛菩薩より
ぞ。見おもなり。いふなり。あう。あう。言ハといひ。こと
なり。神とこそ。いふ。まこと。穀をういふ。なま。ぞ。見おの。これ
を。神とも。神と申さへ。まの。あり。

世の人れこごう。見こり。いふ。よし。と。ま。る。

世れ中れこごう。見人。いた。ゆる。道徳の。よ。なる。俗。あ。を。よ。みて。
さ。や。ら。ま。ふ。い。る。を。よ。い。あ。め。の。なり。或。も。身。こ。ま。や。け。き。れ
な。ど。ら。ひ。て。目。かん。の。さ。と。り。あ。て。文。の。や。ま。ま。し。よ。い。見。よ。む。こと。み。お。

儒佛亦居つゝひるる偽ぞくあり。まこととて。身身を安しと
して。是を志せるものもなきものなり。ふまふま人の齡を
七十ふ及ぶハ。まことふまれなるるを。七十までもあつて
て。はやく是よりと思ふべきことなきども。人みれば。ふれり
ハ思ふが。末のみじうなるを。歌きして。九十までも。百歳までも
生イカま居く思ふが。はこと此情を。とらる。

假字

皇國此言を古書どもハ。漢文がふあけるハ。修言とふもの
なり。て。せむく。あく止るを。故あり。今ハ。かたとい
ふ。おろして。自由ふく。それをして。不自由なる漢文を

そと。あくむやする。といふ。能く。とらえ。命。

かろ國此詞つみ

皇國の言語ふく。がれむ。唐の言語を。い。け。ま。お。なり。ま。や
へ。を。言。とい。ふ。皇國言。あ。ハ。ま。れ。い。わ。い。や。い。ま
と。あり。い。ふ。い。ん。ど。異。なり。ま。れ。い。わ。い。言。い。ふ。こ。と。主。と。あり
て。罕。な。い。も。い。ふ。こ。と。此。何。の。こ。と。なり。い。ふ。こ。と。ま。れ。なり。ハ。罕。と。い。ふ
こ。と。主。と。あり。て。い。ふ。こ。と。の。ほ。も。なる。なり。他。の。言。も。は。ま。ら。ひ。多。し。
と。て。れ。こ。と。み。ね。か。の。め。し。

佛經此文

ま。て。佛。經。の。文。の。い。と。つ。な。を。め。の。め。り。一。つ。ハ。短。く。い。ひ。と。し。

きこころふ。又祈ることきこほりひびき。神はきこもてや。きこもておの
ごや思ひぢのまじりたる。いふぞや。くさくさ。もまのいふ。いづ
神此みまほちのまじりたる。平日ふおほき。ちのちのちのおのづか神の
るふとほぐ。はうねたぬを。きこ。まを。百兩の金ほ。き。あ人の
九十九ま。何して。一あま。いづ。う。その。い。人。を。悦。び。き。
恨むべき。祈る。こと。か。お。を。ひ。た。と。神。を。え。お。き。お。お。う。み。を。
え。九十九。兩。何。く。く。お。人。を。え。う。ち。た。の。お。思。ひ。て。う。ら。い。の。ご。と。し。
九十九。あ。の。め。を。を。き。て。今。一。兩。あ。と。ぎ。る。恨。む。と。い。ふ。

道

神の道。世。を。ま。ご。の。る。ほ。と。は。道。なり。み。お。人。志。を。ん。う。お。を。ぬ。

皇國の道。ち。の。ふ。と。づ。ふ。糸。は。助。む。う。り。世。の。と。り。て。あ。が。る。こ。や。
ち。ぬ。他。の。國。の。道。の。は。び。こ。り。ふ。は。び。こ。り。を。い。う。お。の。こ。り。
う。ほ。が。お。ひ。の。神。の。い。う。ら。を。ま。べ。な。れ。お。ち。を。け。て。

文化七年午三月

鈴屋藏板



和歌三代調類題

全六冊

あはれ二代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに
あはれ三代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに
あはれ三代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに
あはれ三代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに
あはれ三代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに
あはれ三代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに
あはれ三代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに
あはれ三代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに
あはれ三代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに
あはれ三代調と古今後撰拾遺此二代集の時代の歌人の歌の成るべきに

書肆

尾張名古屋本町七丁目 永樂屋東四郎
江戸日本橋通白銀丁三丁目 同 出店

